

## 中原中也と安原喜弘

——一九三五年四月二九日付書簡をめぐって——

加藤邦彦

中原中也の友人、河上徹太郎は「中原の死後、(中略)彼の私宛の手紙を通読した」結果、「そこには果して私にとつて彼の詩集を読むより興味も価値もあるものを発見した」と述べている。自分に送られた書簡のほうが中原の詩集よりも価値がある、と河上はいうのだ。しかし、わたしたちの評価が河上のそれと一致する必要はまったくもってない。河上と違い、わたしたちは中原書簡の直接的な受信者ではないのだから。また、中原の書簡は「すべて彼の気儘なその時々、その場所と気分によって放たれるメッセージであって、受信者の方でも、特に取っておくという気にはならない程度のものであった」と語る大岡昇平のように、直接的な受信者たちがすべて河上と同様に感じていたわけでもない。同じ直接的な受信者でも、発信者との関係によって書簡に対する印象は異なる。したがって、中原の書簡について考えようとするなら、発信者である中原と受信者との関係が必然的に問われなければならないだろう。

今ここで注目したいのは、中原が安原喜弘に宛てて送った書簡である。現在知られている中原の書簡は『新編中原中也全集』第五卷(角川書店、二〇〇三年四月)に収録されている二二五通に、その後発見された二通を加えた計二二七通。その内訳を年ごと、受信者ごとに示したのが【資料】の「中原中也 年別、受信者別書簡数一覧」である。これをみれば一目瞭然のように、安原はおそらく中原からもっとも多く書簡をもらった人物で、封筒のみのもを含めると一〇九通、それらを除いても一〇二通もの安原宛書簡が現存している。一般的に、書簡は発信者と受信者の間にある程度の空間的な距離がなくては書かれることが少ない。ところが、中原は安原が京都大学に在籍していた一九二九—三三年の間だけでなく、安原が東京に戻ってきた後も頻りに書簡を送付している。ここに、ふたりの友情の特異さがあるといえる。ただ、もしかするとそれはふたりの友情というより、中原の友情のあり方の特異さなのかもしれない。さきの一覧をみると、中原は

【資料】 中原中也 年別、受信者別書簡数一覧

	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	計
阿部六郎													2	2
安西禱男											1			1
石川道雄													1	1
伊東静雄											1			1
井上究一郎													1	1
大谷従二													1	1
河上徹太郎			3	1	3	6		1					1	15
小出直三郎					1			2						3
後藤信一													1	1
小林秀雄		6	2											8
更科源蔵												1		1
清水一継												1		1
高田博厚							2							2
高橋新吉			1											1
高森文夫											1			1
竹田鎌二郎										5	4		1	10
津村信夫										2	3	1	3	9
富永家	2													2
富永次郎					1									1
富永太郎	2													2
友野代三													1	1
中垣竹之助											1	2	1	4
長谷敏男													1	1
中原フク			3			2	1						5	11
中村古峯													1	1
西川マリエ													1	1
西川満													1	1
長谷川泰子 (小林佐規子)				2	2		1	2	1		2			10
本田茂光													1	1
前川佐美雄										4	4			8
正岡忠三郎	3	3	1	1										8
松田利勝							2	1					1	4
安原喜弘						10	18	30	19	14	9	2	7	109
山岸光吉								1				1		2
吉田進										1				1
計	7	9	10	4	7	18	24	37	20	26	26	9	30	227

\* 1925～37年に送られた中原中也の書簡を、年別、受信者別にまとめた。

\* 【新編中原中也全集】刊行後に発見された昭和7年7月21日付山岸光吉宛書簡、昭和10年4月17日付高森文夫宛書簡も含む。

\* 昭和12年1月13日付中原フク・孝子宛書簡は、フクのみカウントした。

安原だけに頻りに書簡を送っていたように見えるが、現在知られていないだけで、ほかの友人たちにも同様に中原は書簡を送っていたかもしれないからだ。しかし、友人の多くは中原の書簡を何らかの事情によって失ったが、安原はそれを常に大切に所持していた。「戦時中も肌身離さず命のように」中原の書簡を保管していたのである。安原にとって中原はそれほど特別な友人だったということだろう。

ところが、ふたりの関係に変化が訪れる。それは一九三五年のことだ。本稿では、そのきっかけとなった四月二十九日付書簡を中心に中原の書簡をいくつか取り上げ、そこから浮かび上がってくる中原の意識、および中原と安原の関係について考察したい。

\*

一九三五年四月二十九日付安原宛書簡に、中原は次のように書いている。

昨晩は失礼しました 左に書きます所は何も今日此の頃といふ日に書かなくてはならぬ事柄ではないのですが、一寸書いてみたいと思ひます

安さんがひどく沈黙家であるわけは、自分の判断を決して話すまいとする、非常に遠慮深い気持から来るのだと思ひます そこでその事が相手にとつてはどういふことになるか

を、聊か独断的になるかも知れませんが、書いてみます 相手としては、可なり気味の悪い感じが先づ尠くも最初はするのです 何を考へられてゐるのか分らないので。で結局カンに頼つてあと話しつゞければつづけるといふことになりませんが、カンといふ奴は瞬間的な役には立ちますが、長いことには間に合ひません 従てカンに頼つて話しつづける限り随分見当を違へて話すことも出て来ます それにまた、話の極く具体的な点で、(つまり例で以て云ひますと)「昨夜はAと一緒にだつた」と云つて、またBも其処にゐた場合、あとでBの話が出ると、「アラBもゐたのか」といふことになり、またAと自分とで起つた而もBがゐては起りさうもないことの話が出ると、(事實はBはもうその時帰つてゐたとしても)「変だな」といふことになり、それを「変だ」と言はれないとすると、相手はたゞ顔色が変わつただけを気付き、さりとしてベンメイするのも妙な場合はともあれ話しつゞけて行かなければならないのです。すると話す方は余計な氣を使つて、使つただけ話は一層不慥かとなつたりするやうなわけです。勿論世間一般では此のやうな場合話し手の方はともかくキマリキツタことだけを云ふことにするのですが、僕などそんな芸当のない者ですから、なんだか辛いことになります。それが二人だけの場合はまだいいのですが、もう一人誰かゐる、そいつに向つて話すことを、沈黙家が自分も聞いて判断しつづ

ある場合、その人はどう聞きつつあるかゞまるで分らないので、ともかく沈黙家を非常に避けるやうにして話をするより他なくなるのです（中略）

思つてゐることの半分も現せませんし、もともと余程僕には表現困難な事柄なのですが、一口に云へば、「もつと苦情を云つて欲しい 察しだけで話が始まるとは思へない」といふやうなことの事です。こつちは五里霧中で、そこで気のよさだけでしやれば、相手は益々五里霧中ではなくなりこちら益々五里霧中を深めるのでは堪りませんし又、その上ではどうしようと考へやうもないことなのです。

この書簡で展開されているのは、安原の「沈黙家」ぶりに対する激しい批判である。後年、安原は『中原中也の手紙』という著作で、自分宛の中原書簡を引用しながらそれを読んだときの心境を述べているが、この書簡については次のように記されている。

初めて見る私への答。同時にこれは又、これまで六年余の間変ることなく持続され来つた私達の在り方に対する痛烈な批判でもあつた。私は詩人の答を甘受し、己れの罪深さに茫然とした。私は崩れゆくものを凝視し、祈るような気持でこの手紙を読んだ。

安原は中原から送られた書簡を「私への答」であると同時に「私達の在り方に対する痛烈な批判」と捉えた。一方、安原のこのような理解に強く異を唱えたのが中村稔である。

これは「私達の在り方に対する痛烈な批判」ではない。中原と安原の交友の在り方に対する批判ではない。安原の在り方に対する批判である。つまりは、それが正当であるかどうかはともかくとして、中原は、安原が「観賞者」の立場に固執して、中原の魂にふれるような姿勢で対応しないことに苛立ち、安原との訣別に近い宣言をしているのだ、とみるべきなのである。

確かに、中原の書簡ではふたりの交友というよりも「安原の在り方」が批判されているようにみえる。中原の願ひは「もつと苦情を云つて欲しい 察しだけで話が始まるとは思へない」ということであり、安原に変化してほしいということである。とすれば、中原は「私達の在り方」を批判しているわけでは決してない。安原に対してみずからの要求を一方的に突きつけているのである。

しかし、「だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです」という『新約聖書』の言葉のように、相手に向けた言葉はほとんど常に発言者自身にも向けられていることをわたしたちは知っている。たとえば、よく知られている一九三三年一月二十九日付の安原宛書簡。

昨夜は失礼しました。

其の後、自分は途中から後が 悪いと思ひました。といひ

ますわけは、僕には時々自分が一人であつて感じたり考へたりする時のやうに、そのまゝを表でも喋舌つてしまひたい、謂ばカーニバル的氣持が起ります。その氣持を格別悪いとも思ひませんが、その氣持の他人に於ける影響を氣にしだすや、しつこくくなりますので、そこからが悪いと思ひました。

右の書簡は中原の伝記的事項を考える際に重要なものだが、今はそのことは問題にしない。この書簡において、中原は安原に自分の「カーニバル的氣持」に由来する前日の行動を謝罪するとともに、自分の「カーニバル的氣持」の「他人に於ける影響」を意識し、それを「しつこく」相手に問ひたすみずからの行為を諫めてゐる。「時々自分が一人であつて感じたり考へたりする時のやうに、そのまゝを表でも喋舌つてしまひたい」という「カーニバル的氣持」を持つこと自体は否定されていない。問題にされてゐるのは、その「感じたり考へたり」したことをそのまま人前で口にしてしまふ行為、そしてその發言に対する反応を相手に執拗に求めてしまふことだ。中原はこの書簡に安原への謝罪を記すと同時にみずからの態度を振り返り、自分自身に対する戒めの言葉を書き記してゐるのである。

「感じたり考へたり」したことをそのまま人前で口にしてしまふ行為を戒めるとは、みずからに人前での安易な發言を禁じ、沈黙を課すことにはかならない。そのことを念頭に置きながら、やはりよく知られてゐる一九二九年六月三日付小林佐規子宛書簡をみ

てみよう。

今日中村屋で、一番本當の意味で流れてゐなかつたのはあつたです。あなたは一番根のある人なのだが、一番純粹に根のある人といふものはとかく損得の感情に乏しく、正直で氣が好すぎて、慾氣はなしに自分自身ならざることを平気でやるのです。慾氣がないので実感のないことに平気で慣れるのです。——が、それまでは何でもありません。寧ろ慾氣のないことなど賞讃すべきだ。

然るに、恐いのは、遂に自分を見失ふといふことです。見失つた人は意味(言葉)が解せなくなる。そして遂に、たとへばあなたのやうな一番根のある人が、一番根のない時間を過ごし、そして温しくも自分は根がないなと何時の間にか信ずることです。そしてもう何もかもが判然摺りなくなる。——その時です。「我に職を与へよ」だの「何をすればよいか」だのと考へ出すのは。

それではそんななることを防ぐにはどうすればよいか。それは、純粹な人はとかく「流す」ことが好きなものだが、それを出来るだけ喰止めればよい。もつとよくいへば、例へば外出なら外出を制限するといふより寧ろ、むやみに外出したくならない氣持、つまり自分自身であればよい、(だいたいよく外出する人は、その本心では外出したくながる側の人だといふことはお分りでせうね?) それにはただ沈黙が

大事なのです。自分であることがね。つまり強くなければなりません。(中略)

自分自身でおありなさい。弱気のために喋舌つたり動いたりすることを断じておやめなさい。断じてやめようと願ひなさい。そしてそれをほんの一時間でもつづけて御覧なさい。すればそのうちきつと何か自分のアブリオリといふか何かが働きだして、歌ふことが出来ます。

実に、芸術とは、人が、自己の弱みと戦ふことです。その戦ふ力が基準となつて、諸物に名辞なりイメツヂなりを与へる力です。

中原はこの書簡で佐規子に対し、「自分自身」であるために「喋舌つたり動いたりする」のをやめ、「沈黙」することを奨励している。だが、「カーニバル的気持」について記されていたさきの安原宛書簡を思い起こせば、「沈黙」が必要だったのはほかならぬ中原自身だったはずである。安原宛書簡が書かれたのは、この小林佐規子宛書簡が書かれた約三年半後。しかし、ここでは両者のタイムラグや前後関係はさほど重要視する必要はないと思われる。というのも、右の佐規子宛書簡には「芸術の動機」という題が付され、どのように「歌」や「芸術」が生まれるかを中原が開示する内容になっているからだ。中原は、「詩人の資質を立派にもつた」小林佐規子にどのような「歌」が生まれるかを語りながら、詩人であるみずからの「歌」が生起する瞬間を自己確

認している。そのなかで発見されたのが「沈黙」の重要性だ。つまり、詩人である以上、中原自身にも「沈黙」は必要不可欠なのである。とすれば、右の書簡の言葉は単に小林佐規子に向けられているばかりでない。佐規子と同時に、詩人であるみずからに對しても向けられているのである。中原は、自分自身に言い聞かせながら佐規子宛書簡の言葉を綴っているのだ。

ここでふたたび、さきの一九三五年四月二十九日付安原喜弘宛書簡に話を戻そう。確かにこの書簡は一見すると安原の「沈黙家」ぶりを批判したものにようにみえる。しかし、今一度中原の主張を丁寧に見てみたい。中原が安原の「沈黙家」ぶりを批判するのは、安原が「何を考へられてゐるのか分らない」からである。分らないので、中原は「カンに頼つて」話すしかない。しかし、「カンに頼つて話しつづける限り随分見当を違へて話すことも出て来」る。特に困るのは自分がうまく説明できない場合で、聞き手から「変だ」といわれないと、話す側は相手の「顔色が変わつたことだけを気付き」、そのせいで「余計な気を使って、使つただけ話が一層不慥かとなつ」ていく。それは、自分のような「キマリキツタことだけを云ふ」芸当を持たない人間にはつらい、というのが中原の言い分である。

中原の批判の矛先が「沈黙家」安原に向いているのは間違いない。安原がもっと言葉を発してくれば、中原はこんな苦勞を味わわずに済んだのである。引用の中略部分には「それに沈黙家と

いふものは、事実誤解を屢々してゐるのではないでせうか。それに、多少とも独善的でない沈黙家といふものは僕には考へられませんが」とも書かれ、だんだん「沈黙家」を批判する語調が激しくなっていくが、それは自分の記した言葉に中原が徐々に興奮していったためであろう。

ただし、これまでの検討を考慮すれば、この書簡は単に安原を批判しただけではないはずだ。安原が何もいってくれないので「カンに頼つて」話をするが、その「カン」が得てして見当違いだからこそ中原はつらいのである。また、自分が最初から相手にうまく説明できていれば、相手の顔色が変わることも相手に余計な気を使う必要もあるまい。つまり、中原は安原の心境をうまく読み取れない自分自身に対して苛立っているのである。中原の批判の矛先は「沈黙家」安原に向いている一方で、自分自身に対しても同時に向いているのだ。

すでに確認したように、安原はこの中原書簡を「私への答」、  
「私達の在り方に対する痛烈な批判」と捉えた。わたしには、この理解は正当であるように思われる。非があるのは、中原にあま  
り多くを語らなかつた「沈黙家」安原ばかりではない。そのよう  
な安原だからこそ、どんなときもみずからに寄り添うことができ  
たのは、中原自身、一九二八年以来の安原との交友のなかでよく  
承知していたはずだ。中原との交友を振り返って、河上徹太郎は  
「彼は前へ据ゑて話を聞いて貰ふ友人を求めて訪問して歩いた。

(中略) 対談の際に自ら真理を発見すると共に相手の心理を微妙に感応した。この敏感さは非常に鋭いと共に、一方非常に一面的であつた」と述べているが、安原の感情が察せられないことは、たとえ「一面的」であれ、「相手の心理を微妙に感応」するのに長けていた中原には大いに不本意だつたらう。その苛立ちを、中原は書簡を通じて安原にぶつけた。しかし、安原の感情をうまく察することができないのは、「相手の心理を微妙に感応」するのに長けているようにみえながら、どんな相手にもそれが可能なわけではないという中原自身の問題でもあつたのである。安原はもっと語るべきだつたし、中原はもっと尋ねるべきだつた。その意味で、さきの中原書簡に対する安原の「私達の在り方に対する批判」という見解は正しいといえよう。

交友関係に問題があるとき、どちらか一方にのみ非があるわけでは決していないということ。このような両者の関係は、中原の生前未発表小説「青年青木三造」にもみることができ。未完に終わったこの小説の主人公青木三造は「何か、言ふべきことがあるやうな気がし」ているのに結局は「押し黙」つてしまう人物で、そのモデルが安原であるのは疑ふ余地がない。この小説において、「作者」なる語り手は次のように述べている。

今、三造は、世間の知らないことを感じてゐる。それを語り出するためには時間と意志が必要である。然るに彼の意志は強いとばかりはいへない方だし、それに三造の身辺には絶

えず三造を世間並のものにしようとする誘惑物がないとはいへぬので、三造と世間との調停役を、いつてみれば作者は買って出ようとしてゐるのである。勿論、三造が世間並になるとしても、嘆くがものは誰にもないのであるが、世間が知らないことを感じてゐる者は、それを明白な形に迄して、世間に呈出する方がよいのである。

三造は「世間の知らないことを感じてゐる」けれども「それを語り出するためには時間と意志が必要」である。その三造に代わって、「作者」は彼の「感じてゐる」内容を「世間」に知らしめ、社会における三造の位置を確立しようとしている。「三造と世間との調停役」を買うとは、そういうことだ。しかし、その「作者」にも、右の引用部分の少し前に「それでは、彼には何が語りたかつたのであろう？ 何が語りたかつたのであらうか？

蓋し、語る言葉はなかつたかもしれぬ、歌ふべきことがあつたかもしれぬが、それは今の事ではない」と書かれてるように、三造の心中はよくわからない。三造の感じていることを世間に紹介しようにも、「作者」はそれを十分に理解してないのである。

この話が長くは続かず、中絶されてしまつたのは、おそらくそのせいだろう。そもそも、三造に「語る言葉」があつたかどうかすら理解できていない「作者」が「三造と世間との調停役」を買つて出ること自体、無謀だつたのである。そして、青木三造のモデルが安原であるならば、この「作者」の無謀さは「青年青木三

造」の作者、中原の無謀さでもあるに違いない。やはり非は、安原ばかりに一方的にあるわけではないのである。

\*

ところで、一九三五年四月二九日付書簡は、安原の「沈黙家」ぶりを批判した最初のものではない。一九三一年七月一四日付安原宛書簡に、中原は次のように書いてゐる。

会つて話したいと思ひます、先日君の手紙に、僕は返事をしてゐませんが、僕には君の今の気持に手紙で返事したくなかつたのです、(中略)しかし僕は早く会つて話してみたいのです。君はあんまり無言すぎます。それでは誰もどうにもなりません。

この時点ですでに中原は安原が「無言すぎ」ることを批判している。つまり、中原は一九三五年より前から安原の口数の少なさに不満を持っていたし、実際にその不満を口にしてもいたのである。ただし、この批判を安原がそれほど問題に感じていなかったことは、右の書簡について『中原中也の手紙』に何も記されていないことからうかがわれる。また、さきに取り上げた「青年青木三造」は一九三二年前半の執筆と推定されており、おそらく中原はこのころより安原の「沈黙家」ぶりを何とかしようとしていたのだろう。ところが、その試みは首尾よくいかなかつたのは、す



でに確認した通りだ。

それ以降、一九三五年四月二九日付書簡が書かれるまでの間に、中原と安原の間に果たして何があったのか。もちろん、同書簡中に「左に書きます所は何も今日此の頃という日に書かなくてはならぬ事柄ではないのですが」と記されているように、安原批判がこのときなされたことに深い理由などないのかもしれない。

また、続く六月五日付書簡に「唐突な手紙差上げ、唐突は如何にも唐突だと、その後日を経るにつれて感じてみました」と記されていることから考えると、四月二九日付書簡が書かれたのは突然の思いつきだった可能性もある。しかし、『中原中也の手紙』において、この書簡を引用する直前に安原が次のように記していることをみると、一方の当事者たる安原のほうには、このころ中原との付き合い方について決して小さくはない心境の変化があったようだ。

昭和三年秋以来六年半に渡る詩人と私との交友にも今漸く  
転機が訪れた。

詩人は家庭生活に入り、一児をもうけ、その交友の範囲も次第に広がり、詩名も漸く一部の人々の間に認められるところとなった。この間私は私なりに唯一筋の心情を以て詩人の身辺に寄り添い、それは謂わば極めて個人的な雰囲気の中の持続であつたのだが、この様な私の心情も私のささやかな努力も今はその必要を失つた。心届かず、無能で失敗ばかり

であつた私の介抱も最早無用となりそれは寧ろ詩人にとつて大きな負い目とすらもなりつつあることを私は感じ出してゐた。(中略)

尚又、昭和八年の一月頃を絶頂とする彼の魂の動乱時代、日々のおわただしい行き来の中にふと生じた様々な疑惑(中略)が私に対しても解き得ぬ誤解としてその儘彼の心に残り、彼の心の淵深く固定しているのを全く思いがけなくも知つた時、私は唯々茫然とするばかりであつたのだが、私は何か身の証をたてたいと希い、既に或る決意をしたのである。

私は彼の周囲から身を引きつつあつた。殊更らにそれと彼の気付かぬ如く、意識して少しずつ詩人の世界から離脱しつつあつた。

中原の境遇の変化に伴い、安原は「或る決意」をして中原から「身を引きつつあつた」という。とすれば、一九三五年四月二九日付書簡は、中原がそのことを察知して行つた批判だったと取れなくもない。さきにみたように、「非常に一面的」ながらも「相手の心理を微妙に感応」することに長けていたのが中原だった。

一方、安原の側に「或る決意」があつたように、ふたりの関係についての激しい批判を行うに際して、中原のほうにも何かしらの決意はなかつたか。そのことを考える際、一九三四年一月三〇日付で安原に寄贈された「薔薇」という詩篇は重要であると思われる。

開いて、ゐるのは、／＼あれは、花かよ？／＼何の、花かよ？／＼  
薔薇の、花ぢやろ。／＼しんなり、開いて、／＼こちらを、む  
いてる。／＼蜂だとして、ゐぬ、／＼小暗い、小庭に。／＼あゝ、  
さば、薔薇よ、／＼物を、云つてよ、／＼物をし、云へば、／＼答  
へよう、もの。／＼答へたらさて、／＼もつと、開かうか？／  
答へても、なほ、／＼ジツト、そのまゝ？

安原は「珍しく毛筆で和半紙に描かれている」この作品を「長  
く大切にし、年老いた日に、格別丁寧な表装にして掛け軸にし  
た」<sup>⑩</sup>。この軸は二〇二二年、中原中也記念館で開催された特別企  
画展「中原中也の手紙——安原喜弘との交友」で公開されたが、  
それをみていて気づいたことがある。

歌い手は「薔薇」に対して「物を、云つてよ」と訴えている。  
何かいってくれば、それに対して歌い手は「答へよう」があ  
る。答えたら薔薇が「もつと、開くか、／＼ジツト、そのまゝ」  
かはわからない。しかし、「物を、云つて」くれなければ「答へ  
よう」はないし、そうである以上自分と「薔薇」の関係はいつま  
でも変わらない、というのがこの詩の主旨である。「薔薇」が安  
原のことを指しているのは、これまでの考察より明らかだ。ちな  
みに、さきに取り上げた「青年青木三造」でも主人公は花にたと  
えられており、「彼は、押し黙る。押し黙った顔といふものは、  
人の前で、つづくものではない。それはやがて花のやうに萎む」、  
「彼は朝顔の花のやうに夏の朝、感じてゐるが、それは彼の心中、

形なき歌ともなるが、彼が声を出して歌つてゐるのをみたものは  
ない」と記されている。

ところで「薔薇」は、もともと「(なんにも書かなかつたら)」  
という全三節の生前未発表詩篇の第二節として書かれたもので、  
それを独立させて安原に寄贈されたものである。第一節は以下の  
通り。

なんにも書かなかつたら／＼みんな書いたことになつた／＼覺  
悟を定めてみれば、／＼此の世は平明なものだつた／＼夕日に  
向つて、／＼野原に立つてゐた。／＼まぶしくなると、／＼また  
歩み出した。／＼何をくよくよ、／＼川端やなぎ、だ……／＼  
土手の柳を、／＼見て暮らせ、よだ

冒頭二連は『新編中原中也全集』で指摘されているように、お  
そらく一九三四年二月の『山羊の歌』出版に関連しているだろ  
う。<sup>⑪</sup>「覚悟を定めて」詩集を出してみれば、「なんにも書かなかつ  
た」はずなのに「みんな書いたことにな」り、その結果、難解で  
混乱していると思つていた「此の世」が「平明なもの」にみえる  
ようになった、という歌い手自身の感覚の変化が、第一——二連で  
歌われている。「何をくよくよ、／＼川端やなぎ」は『新編中原中  
也全集』で何も注記されていないが都々逸の一節で、高杉晋作の  
作ともいわれているが、もつと古くの歌謡にも用例があるらしい。<sup>⑫</sup>  
この一節を取り入れた「東雲節」が明治三〇年代に流行した。<sup>⑬</sup>  
「東雲節」は「ストライキ節」ともいわれ、演歌師によって全国

に広められた。さまざまな歌詞のヴァリエーションがあるが、そのうちのひとつを引用すれば次の通りである。

なにをくよく／川端柳／焦がるる　なんとしよ／水の流れ  
を見て暮らす／東雲の　ストライキ／さりととはつらいね  
てなこと／おっしやいましたかね<sup>(1)</sup>

この歌詞の「水の流れを　見て暮らす」という部分は「(なんにも書かなかつたら)」では「土手の柳を、／見て暮らせ」とされているが、この改変は中原の記憶違いではなく、一種のパロディであると思われる。「水の流れを　見て暮らす」だと主体は「川端柳」であり、「くよくよ」しているそれは何かに対する「焦がるる」気持ちを抱きながら、その感情をいかんともしようがなく、ただ「水の流れを　見て暮ら」している、という意味に取れる。一方、「(なんにも書かなかつたら)」の「何をくよくよ、／川端やなぎ、だ……」では、「川端やなぎ」は対象化されている。また、この詩の最終二連は、世間では「何をくよくよ、／川端やなぎ」といわれるけれども「川端やなぎ」のように「水の流れを見て暮ら」してはいけない、いつまでも「くよくよ」などしておらず、そこから前進してむしろ「土手の柳」をみて暮らしていかなければならなければならないのだ、ということが詩の読者あるいは歌い自身に言い聞かせるように歌われていると理解することできよう。この解釈は、第三―四連における「また歩み出」すイメージとも合致している。歌い手は、自分が今いるとこ

ろから一歩足を踏み出そうとしているのである。そして、この詩が『山羊の歌』の出版に関連しているとすれば、その歌い手の心境は、詩集出版を契機に中原にもたらされた感情そのものであるに違いない。

さきの引用で安原が「詩人は家庭生活に入り、一児をもうけ、その交友の範囲も次第に広がり、詩名も漸く一部の人々の間に認められるところとなつた」と述べていたように、『山羊の歌』を刊行したころの中原は、生活環境や自分を取り巻く周囲の状況が変わりつつあった。そうした変化とともに、安原との関係についての心境の変化があり、「(なんにも書かなかつたら)」第二節を独立させた「薔薇」があつたのではないだろうか。おそらく中原は「薔薇」を安原に寄贈することで、自分とともに変わらなことを安原に要求しているのである。双方の変化によって、ふたりの関係を次なるステージへと移行させようとしていたのだ。だからこそ、「薔薇」では「あゝ、さば、薔薇よ、／物を、云つてよ、／物をし、云へば、／答へよう、もの」と歌われているのではないか。ここに示されているのは「薔薇」とのコミュニケーションの「可能性である」。「薔薇」が「物をし、云へば、自分はそれに答えることができる。そのためには、まずは自分から相手に「物を、云つて」ほしいと要求しなくてはならない。変化する必要があるのは安原だけではない。安原の「沈黙家」ぶりにこれまでほとんど何もいってこなかった自分自身も変化しなければならぬので

ある。そうしたみずからの変化を示すとともに相手にも変化してほしいという願望を歌っているのが、「薔薇」という詩篇なのだ。さらに重要なのは、中原がその願望を詩によって安原に伝えようとしたことである。中原は安原を詩人として認識していた節がある。「青年青木三造」にも、すでに引用したように「彼には何が語りたかつたのであろう？（中略）語る言葉はなかつたかもしれぬ、歌ふべきことがあつたかもしれぬ」「彼は朝顔の花のやうに夏の朝、感じてゐるが、それは彼の心中、形なき歌ともなるが、彼が声を出して歌つてゐるのをみたまものはない」などの記述がある。中原は安原を、語る言葉は持たないけれども歌うべきものはあつた人、歌になるような感情はあるがそれを言葉にしない人、と理解していた。安原の子息喜秀は父のことを「自らは詩を書かなかつたけれども詩人であつた人」という意味で「（詩人）」と呼んでいるが、まさしく中原はそのような認識を安原に対して持っていたのである。

詩を書かない詩人、というのは巷でしばしば耳にする奇妙な表現だが、このような言い方が成り立つのは安原がもともと詩を書いてきたからである。安原は、中原と知り合う以前より詩や文章を書き、みずからの関わりのある雑誌等にそれらを発表していた。中原と面識を得た後にも、安原は同人誌「白痴群」に作品を発表している。そのうちのひとつ、一九二九年九月発行の第二号に掲載された「詩一篇」が「八月私は雑誌に小さな詩を発表し

た。中原と私との交遊が真に始まつたのはこの詩を機縁としてである」と安原がいうところの「この詩」に該当することは、安原喜秀による指摘がある。また、その「詩一篇」が「白痴群」創刊号の冒頭を飾る中原の「詩友に」への応答歌であることを中原豊が指摘しているが、そのことはふたりの関係を考える上で非常に重要だ。中原が「詩友」に向けて「白痴群」創刊号に掲げたメッセージに、安原は詩をもって応えたのである。つまり、中原にとって安原はみずからの呼びかけに詩で応えてくれた、まさしく「詩友」だったのである。一九三三年に同人誌「紀元」の創刊が決まると、中原は「別に五月蠅いこともないのですから、ともかく這入つてみられればよいと思ひます」（七月二〇日付書簡）と安原に同人加入を熱心に勧めているが、その勧誘も右のような安原に対する中原の認識に由来していると思われる。

その安原へのメッセージを、中原が「薔薇」という詩篇に託して送ったこと。このとき中原は、「薔薇」が指し示すものやこの詩に籠められたメッセージを「詩友」である安原ならば理解してくれるかもしれない、という期待を抱いていたのではないか。そして、『山羊の歌』の刊行によって自分の環境が変化しつつある今、これを機会にふたりの新たな関係を構築し、これからも自分とともに詩人として歩んでいってほしい、という希望を安原に対して持っていたのではないだろうか。安原へのメッセージが書簡ではなく詩で、しかももともとは全三節だった（なんにも書か

なかつたら)の第二節をわざわざ独立させて安原に寄贈した理由は、以上のように推測できる。

ところが、安原に寄贈された詩篇の「薔薇」が彼自身を指していることに、安原は気づかなかつた。安原は『中原中也の手紙』に「薔薇」に同封されていた書簡を引用したのち、「この手紙と一緒に久々で一篇の詩が送られた。それは『薔薇』と題する美しい小品で」あつた、と記しているが、それ以上のことは特に語られていない。つまり、安原にとってこの詩篇は「美しい小品」でしかなかつたのである。安原は、この詩の「薔薇」を字義通りの「薔薇」としか捉えていないのだ。

この寄贈への感謝を安原がどう伝えたかはわからないが、おそらくその返答は中原を失望させるに十分だつたであろう。少なくとも、「薔薇」の意味するものを安原が理解できなかったことに中原が気づいたのは間違いない。それを理解してもらえなければ、いくら中原が安原に変わってほしいと願つても、変わるはずがないのである。そもそも中原には、安原が「薔薇」の象徴するものを理解しているかどうかさえわからない。その安原に対する苛立ちが、彼の考えをうまく読み取ることができない自分自身への苛立ちと相俟つて、ふたりの関係のあり方を激しく批判する書簡を中原に書かせたのではないだろうか。

一九三五年四月二十九日付安原宛書簡は、「薔薇」の寄贈を通じて安原がもはや「詩友」でないと中原に認識されたからこそ書か

れたようにわたしには思える。その意味では、この一九三五年四月二十九日付書簡は「詩友」安原との訣別が述べられたものといえるのかもしれない。

注

- (1) 河上徹太郎「中原中也の手紙」、「文学界」第五卷第一〇号、文芸春秋社、一九三八年一〇月、二五四頁。
- (2) 大岡昇平「解説『中原中也全集』(創元社)第三卷」、「大岡昇平全集」第一八卷、筑摩書房、一九九五年一月、五三頁。
- (3) 安原喜秀「在りし日への径」補遺「手紙」と「核の傘」第一〇号、しゅりんぶ詩舎、二〇〇九年一月、六二頁。
- (4) 安原喜弘「中原中也の手紙」玉川大学出版部、一九七九年四月、一八二頁。
- (5) 中村稔「中原中也と安原喜弘」『中原中也私論』思潮社、二〇〇九年九月、二八六頁。
- (6) 「ローマの信徒への手紙」、「聖書 新共同訳」日本聖書協会。
- (7) 河上徹太郎、前掲文(1)、二五五頁。
- (8) 前掲書(4)では六月一四日付とされている。日付が七月に訂正された事情については『新編中原中也全集』第五卷「解題篇」角川書店、二〇〇三年四月、三八六頁を参照。
- (9) 「新編中原中也全集」第四卷「解題篇」角川書店、二〇〇三年一月、三八二頁参照。
- (10) 安原喜弘、前掲書(4)、一六八頁。
- (11) 安原喜秀「在りし日への径——中原中也以後の安原喜弘」、「シュリンプ」第九号、しゅりんぶ詩舎、二〇〇七年二月、

一二三頁。

(12) 『新編中原中也全集』第二巻「解題篇」角川書店、二〇〇一年四月、三六五頁参照。

(13) 西沢爽『日本近代歌謡史』下巻、桜楓社、一九九〇年一月、一三三三四頁参照。

(14) 同右、二三五〇頁参照。

(15) 『新版日本流行歌史』上巻、社会思想社、一九九四年九月、一七二頁。

(16) 安原喜秀「あとがきにかえて」、安原喜弘『中原中也の手紙』青土社、二〇〇〇年二月、二五九頁。

(17) 安原喜弘、前掲書(4)、一八頁。

(18) 安原喜秀「在りし日への径——中原中也以後の安原喜弘」、『シュリンプ』第十六号、しゅりんぷ詩舎、二〇〇四年十二月、七二頁参照。

(19) 第一七回中原中也の会大会中のシンポジウム「中原中也の手紙——その友情の軌跡」における指摘。

(20) 「詩友に」の読者対象については、拙稿「中原中也、その文学的出発——「朝の歌」から「白痴群」創刊前後まで——」(『中原中也と詩の近代』角川学芸出版、二〇一〇年三月)を参照。

※中原中也の文章はすべて『新編中原中也全集』全五巻、別巻上下(角川書店、二〇〇〇年三月—二〇〇四年一月)を本文とした。

引用に際し、原則として旧字は新字にあらため、一部を除いてルビは省略した。なお、本稿中に【資料】として掲載した「中原中也年別、受信者別書簡数一覧」は、二〇一二年九月一五日に開催された第一七回中原中也の会大会中のシンポジウム「中原中也の手紙

——その友情の軌跡」で呈示した資料に若干の手を加えたものである。本稿自体もそのシンポジウムでの議論を踏まえて書かれており、そこでの発言と重複する部分も多い。パネリストの福島泰樹、中原豊両氏や会場内外での指摘からも大いに示唆を受けた。謝してここに記したい。シンポジウムの模様は「中原中也研究」第一八号(二〇一三年八月発行予定)に掲載される予定である。本稿とご併読いただければ幸いである。